



Title	技術報告：農場公開について
Author(s)	高虫, 慧子
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 8, 90-95
Issue Date	2008-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35013">http://hdl.handle.net/2115/35013</a>
Type	bulletin (article)
File Information	8_p90-95.pdf



[Instructions for use](#)

## 農場公開について

高虫慧子

農場公開委員（平成 18、19 年度）

### 1. はじめに

平成 16 年 8 月、大学農場の存在と意義を広く知ってもらうために、一般市民を対象とした『北大農場探検ツアー』が初めて企画・実施された。その後 8 月から 9 月の間に毎年一回、継続して開催され、次回で 5 回目を迎える。農場の恒例行事として定着しつつある農場公開を、ここで簡単にまとめてみたいと思う。

### 2. 内容



講義室で全体説明（平成 16 年度）

いずれの年も土日のどちらかに開催し、時間は午前 9 時頃から午後 3 時までであった。

平成 16 年度と 17 年度の 2 回は、午前はグループに分かれて場内を見学、午後は馬鈴薯掘りやポテトチップス作りなどの体験を行う形式をとった。午前のグループは、初回の平成 16 年度が「農場全体、園芸・作物、

畜産」の 3 つ、17 年度は「園芸・作物、畜産」の 2 つに分け、大型圃場や水田、大・中小家畜舎、園芸圃場、養蚕室、機械庫などを見学した。

平成 18 年度は収穫や加工の体験を主軸に開催した。午前は作物と畜産の 2 グループに分かれた。作物グループは馬鈴薯やとうもろこし、枝豆の収穫体験を行った。畜産グループは大家畜舎および中小家畜舎を見学し、搾乳体験などを行った。昼休みの時間には、庁舎前のロータリーにトラクタや作業機を展示した他、養蚕室にてまゆ細工の展示を行い、自由に見学できるようにした。また、午後には全員で食育講座を実施した。講義室にてバター作りを体験してもらった後、中庭に移動し、教職員も交えての農場生産物の試食会を行った。

平成 19 年度は新たにスタンプラリー形式を導入し、参加者が 1 日中農場内を自由散策する形にした。スタンプ設置箇所は、水田、畑、馬鈴薯掘り、果樹園、畜舎、ポテトチップス作り、バター作りの 7 箇所とした。畜舎見学を午後のみ限定したため、午後は参加者が畜舎に集中する結果となった。



養蚕室にて（平成 16 年度）

### 3. 報告

#### \* 参加者数の推移（表 1）

いずれの年も募集定員は 50 名であったが、参加人数はその年の広報手段などにより大きく変化した。

初年度は案内を HP に限定したため申し込み者が少なかった。さらに受け入れた旨の連絡や当日の構内案内の不備によって 10 名程度減数し、最終的な参加者は 28 名であった。

翌 17 年度は新聞による告知が功を奏し 47 名の参加となったが、平成 18 年度は新聞による告知を行わなかったためか、参加者 17 名と激減した。

平成 19 年度は 4 回目ということもあってか、64 名と定員を上回る参加受付となった。参加者のほとんどは職員や知人などからの口コミでの参加であった。

＊ アンケート結果から

参加者からは毎年好評を博している。いずれの年も参加者の 9 割が市内在住で（図 7）北大からそう離れてはいないと推測されるが、日常生活ではなかなか作物や家畜を間近に見て触れ合うことはなためか、農場の風景を楽しみ、ブタやウシを目の前にして驚き、非常に貴重な体験をしたとの声が多く寄せられている。

内容では、ブタやウシとの触れ合い、トラクタなどの機械の試乗が好評で、中でも馬鈴薯掘りやブルーベリーの収穫など、自らが収穫した物をその場で食したり持ち帰ったりすることができるものが特に好評であったように思われた。特に馬鈴薯掘りとポテトチップス作りの両方を実施した年は、ほんの一部ではあるが作物生産から食品加工の流れを体験することで、食と農の問題を改めて考えてもらう機会になったと思われる。



ポテトチップス作り（平成 17 年度）

また、説明が大人向けの言葉が多かったので子供向けにわかりやすくしてほしいとの意見もあった。その他、内容に関する要望としては、春の田植え、枝豆や果樹の収穫、除草作業、作物に関する勉強会の開催などが寄せられていた。

＊ 広報活動（農場協議会パンフレットに掲載。HP 作成→農場 HP に。）

参加者の募集は、初年度は農場 HP でのみ行った。しかし、一般市民が HP を閲覧することはほとんどないようで、定員 50 名のところ参加者は 28 名に留まった。そこで次年度は北海道新聞や北大の HP への掲載を試みたところ、参加者は 47 名と増加した。アンケートによると参加者のほとんどが新聞によって開催を知った形となっており（図 2）、新聞掲載による宣伝効果は大きかったと言える。3 回目となった平成 18 年度は HP の他、さっぽろ生涯学習ネットワーク情報誌（Sa:【サア】）にも広告を掲載した。さらに、作製したポスターやチラシを近隣の小学校にも配布するなどして宣伝したが、参加者は前年の半数以下の 17 名であった。平成 19 年度は HP 掲載に加え、新聞掲載も再開した。参加者の 3 割近くが北大職員から開催を知った形になっており（図 3）、これは学術協力係が学内の全部局にチラシを配布した効果が現れたためと推測される。

農場公開では毎年開催の様子を記録として写真に収めているが、参加者からの要望もあり、今年度はインターネット上での掲載を試みた。当初は FSnet に掲載する予定であったが、アクセス権等の問題が発生したため、農場公開の HP を作成し、農場 HP からアクセスできるようにした（農場 HP トップページ【URL: <http://www.hokudai.ac.jp/fsc/farm/expfarm.htm>】→新着情報→農場公開の報告）。

また、全国農場協議会で配布される広報誌『1 大学 1 農場アピール』用に A4 版 1 枚で広告を作

## 技術報告

成、提出した（図 13）。

### \* 反省点・改善点

今年度は公開運営に携わった教職員に、反省点や改善点のアンケートをとったところ、いろいろな意見が出た。以下に項目ごとに編集して掲載する。

- ・ スタンプラリー導入は、イベント性が高く、参加者、特に子供たちに好評で、楽しんで全ての箇所を見学してもらえた。しかし、参加者の意識がスタンプ集めに集中し、説明をあまり聞いてもらえないという場面もあったようだ。また、畜舎は庁舎との距離や休日業務との兼ね合いから、自由散策というプランでは受け入れが難しいため、今回のように午後 1 回と時間帯を限定するか、今までのように引率付のツアー形式とするのが現実的である、との意見もあった。
- ・ 馬鈴薯掘りはそれ自体に集客力があり、リピーターも多く、毎年好評を博している。学内の職員対象の馬鈴薯掘りを一般に拡充する等、農場公開とは別に開いた方がよいのではないか。例えば、大学祭で行う苗販売は、それ自体でかなりの集客力がある。このようなイベントと農場公開の要素を組み合わせると、収益もあり、多くの方に農場の取り組みを知ってもらう場にもなり、メリットが大きいのではないか、との意見が出た。



馬鈴薯掘り（平成 18 年度）

以上の意見の他、公開委員について、全体的に具体的な準備が始まるのが遅く、余裕が無い、慌ただしい印象を受けたとの意見が多く出た。この反省点を踏まえ、また、上記の多岐に渡る意見を検討して農場公開をよりよいものに変えていくためにも、もう少し早い時期から開催方法や職員の対応方法を検討していく必要があると考えられる。

4. 資料

1) 参加者数の推移

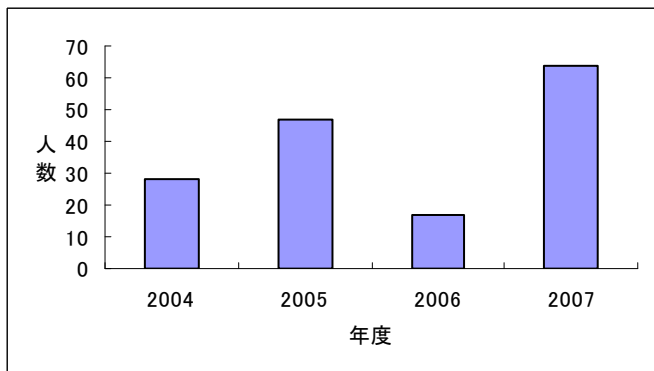


表 1.参加者数の推移

2) 公開データを何で知ったか。(以下、『広報』とする。)

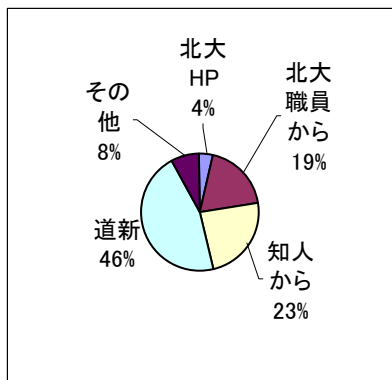


図 1. 平成 16 年度

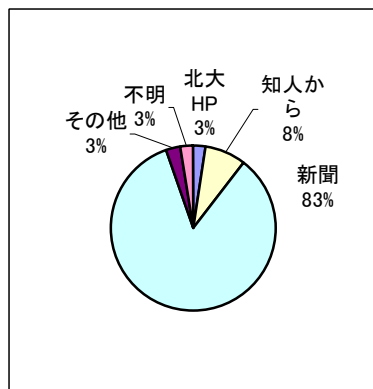


図 2. 平成 17 年度

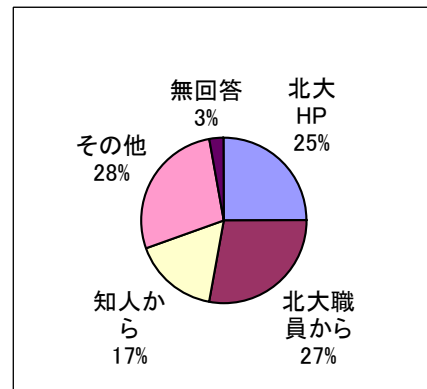


図 3. 平成 19 年度

2) 参加者の構成 (アンケート結果より。いずれも平成 16 年、17 年、19 年の平均値。)

①性別

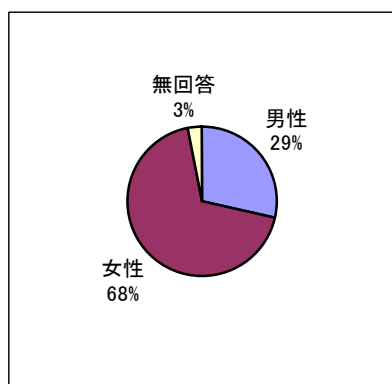


図 4. 性別 (平均値)

②年齢構成

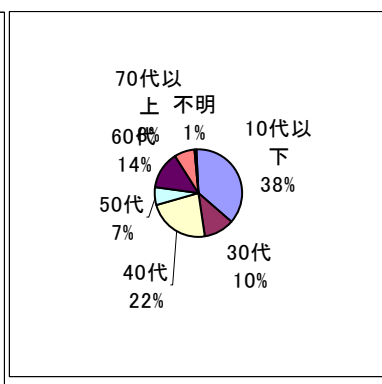


図 5. 年齢構成 (平均値)

③広報

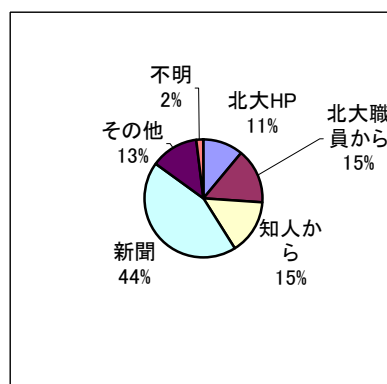


図 6. 広報 (平均値)

④職業

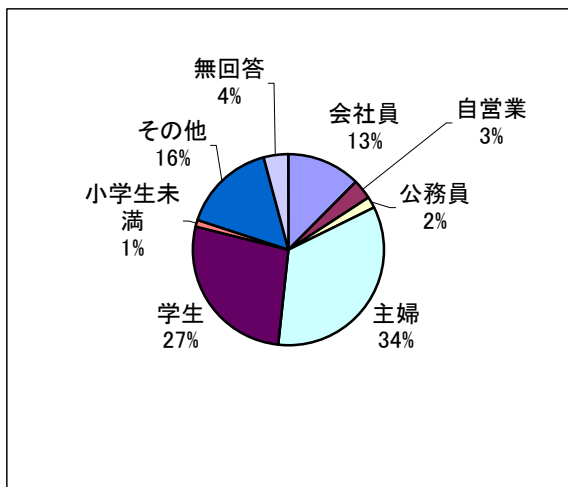


図 7. 職業 (平均値)

⑤居住地域

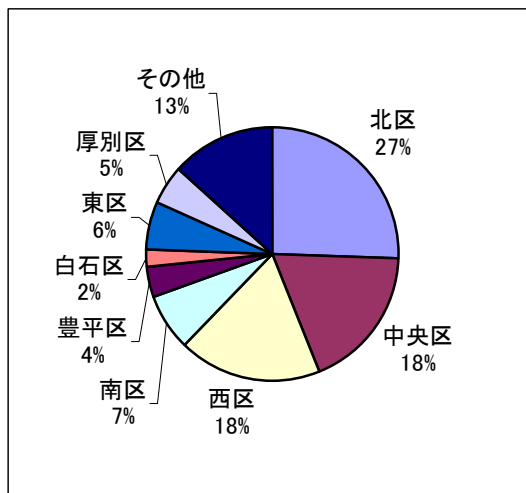


図 8. 居住地域 (平均値)

⑥年ごとの増減 (居住地域)

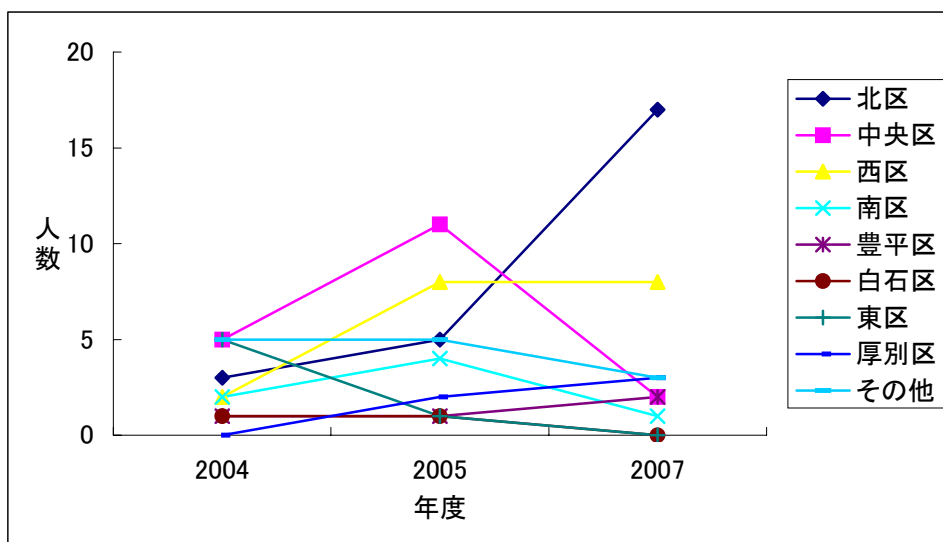


図 8. 年ごとの増減 (居住地域)

5) ポスター

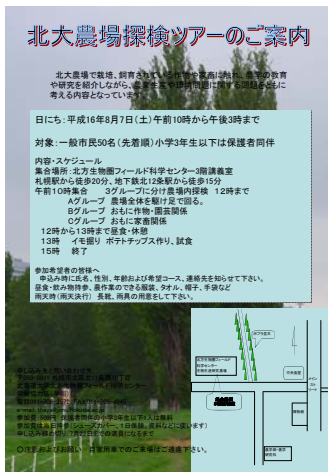


図 9. 平成 16 年度

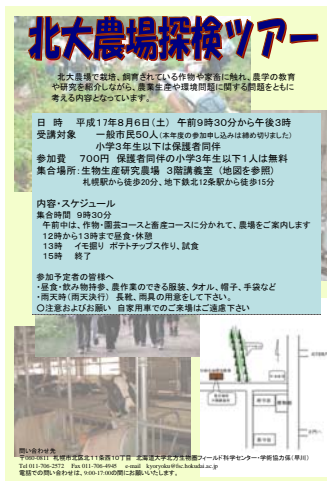


図 10. 平成 17 年度



図 11. 平成 18 年度



図 12. 平成 19 年度

6) 全国農場協議会『1大学1農場アピール』提出原稿



図 13. 提出原稿